

# リズム

## ウィルウェーバー・エン

民族には夫々のリズムがあるように思う。このことに特に関心を深めたというよりも、私はリズムに捕えられてそれを払い落せなくなっている。ドイツ語を、そしてそれを話すドイツ民族を理解し、その文化にふれる時、民族の血と生命を躍動させるファクターの一つとして、リズムを考えてみたいと思う。

卅年程前のことであった。伯母は私の小さい子供を遊ばせていてくれた。その時おもちのたいこを叩くのを、炊事に追われ乍ら私ははっと気に止めた。伯母は阿波の徳島に生まれ、育った。といえば連想されるのは阿波踊りである。子供をひざの上のせてあやしながら、しきりに阿波踊りのリズムをつづけている。昔から、お茶屋、料亭で散財をする人達のうかれた時の調子は、必らずこの調子になることを子供心にも知っていた。盆踊りも、民謡にも、はては童謡にまで、日本の津々浦々にこの四拍子スウィングのリズムはしみ渡っている。あつめ、あつめ、ふつれ、ふつれ、かっあさっんが、蛇っの目っで、おっむかっえ、うつれしっいな、等と浮き浮きさを出そうとする時、このリズムになっちゃまう。有名楽器店の音楽教室で指導に当たっている先生も、「三拍子になるとどうもやりにくくて」と、それは我々の体の中から湧いて来ないものらしいことを肯定された。三拍子は我々にとってはよそゆきのものであろう。

韓国の人達のリズムに気付いたのは、神戸で毎年行われる国際青少年ラリーという、国際都市神戸ならではの催しの時であった。神戸市の小中高校が市と近郊の外国人学校の生徒を招待して、神戸国際会館で互いに民族色豊かな歌、踊り、劇等を披露し合うのである。私の子供達はマリスト・ブラザース・スクールへ行っていたので参加して、私も幾度か見に行った。丁度日本の生徒が「真白き花の」という菊の歌をはじめた時、突然私の前に座っていた男性が体を歌の調子に合わせて左右にゆりはじめたのである。この歌は三拍子であって、それまでに日本の生徒が

## リズム

歌った二、三の歌は四拍子であった。この歌が終ってから分ったのであるが、その男性は韓国学校の校長であった。韓国の子供達のアーリランの合唱が始まった時も、さも氣持よさそうに体をゆり動かされた。韓国人と日本人は系統が異なるらしいということを聞いたことがある。日本人と違って三拍子に魂がゆさぶられるのもその一つであろうか。

韓国の子供の満一才の誕生日にその家庭に招かれた。お座り、伝い歩きのできるその坊やは皆から祝福され、パーティの中心である。伯母ちゃんとはばれる人が可愛くてたまらぬとばかり、子供の前へペタリと座り何か歌い出した。それは三拍子であった。そして両手を揃えてフラダンスのようにいともしなやかに右へ、左へと波打たせ、三拍子に合わせて歌いつづけるのであった。この拍子、この手振り、これは日本人からは全く期待のできぬ異質のものであることを直感して、私は息をのむ思いで見つめた。韓国人の心の故郷は三拍子であろうか。

更にこれを裏付けるようなことに出遇った。初夏の夕暮、我家へ急ぐ道は山へつづく上り坂でその奥には十一面観音の祀られた滝にうたれるほこらがある。老若男女がよくお詣りにきて滝にうたれている。その帰りらしい中年簡單服の婦人が三人、坂を下りて来た。暮色の中にも如何にもすがすがしそうな顔つきが伺われる。突然その中の一人が歌い出した。それは歌謡曲でも民謡でもない三拍子で、タンタンタン タタタタン、のくりかえしであった。歌詞はよく分らない。すれ違いざま、あつ韓国の人だと直感した。先年日本で公演された韓国のリトルエンジェルスが驚く程どれもこれも三拍子であったことも記憶に深く残った。

中国はどうだろうと私の興味はのびた。然し私は中国人との交際がない。国際青少年の集いのような場で、または放送によって、国慶節その他、聞く歌はタンタンタン タタタンタンタン、とスウィングでない四拍子のように思われる。中国の詩をみても何時の時代においてもそれは四拍子に基づいている。

このようなことを考えている時、印度のカルカッタとニューデリーへ立寄る機会があった。しのぎ易い季節であったのでホテルの窓は開放たれていた。町のざわめきと共に方々の商店や飲食店の流す音楽があたかも日本の繁華街のように、それは深夜まで絶え絶えと果てしないようであった。この時神戸の国際青少年ラリーで聞いた印度のリズムを思い出した。印度の娘さん達が盆踊りのように輪になって民族踊りを披露した。そのリズムは、タタタタタンタンタンタタン、のくりかえしで、始のタタタタは早く拍つ。そうだ、印度の人の心を浮き立たせるのはこの拍子だと感じた。そういえばニューデリーのアショカホテルの食堂で毎夜演奏される音楽の底にはこのリズムが流れている。戦後出され

たレコードで注目された印度の音楽もこのリズムに乗っている。

旅から帰って以来親類、知人の死がつづき、お寺に詣ることが度重なった。そこで聞く南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華經、をはじめ読經には三拍子の多いことに気がついた。日本は昔、仏教を熱心にとり入れた。以来千幾百年の歴史を通じて信奉して来たお経は、異質のものだったのだろうか。これを日本語に直し、七五調にする時我々にぴったりと密着するのではないか。

これら東洋の一部の国々に比べてドイツのリズムはどうであらうか。ドイツ人はマーチとユニフォームの好きな国民である。ドラムのターンタン、ターンタンタン、に合わせて重々しく不骨なマーチを奏する。ワルツもドイツ人の手にかかるの不骨なマーチと同じように重々しくなってしまう。

戦中ジャワから日本へ強制避難させられていたドイツ婦人が、終戦間もなく母国のマーチを聞いて、とめどもなく涙を流したのを覚えている。ドイツ人が酔い気分になると、はじめは三拍子あり、四拍子ありで浮かれているが、ひとしきりさわぎが山を越すと、終りはしめくくりのようメランコリーな四拍子のメロディーに移ってしまう。

子守歌はドイツには数多い。程度の高いものには、*Schlafe mein Prinzchen Schlaf ein!*(モーツァルト), *Guten Abend, Gute Nacht*, (シェーベルト), *Schlaf' Heizensöhnchen*(ウエーバー), *Suse klein, Suse mach's Äugelein zu.*(作者不明), *Schlafe, schlafe, holder süßer Knabe*, (ブラームス), *Die Blümlein, sie schlafen*(シューマン), 等がある。前者四つは三拍子、後者二つは四拍子である。日本のねんねころりよ、のように誰にでも歌い古されているものに当るのには、*Schlaf' Kindchen schlaf, dein Vater ist……*がある。*Ei ja, Popel ja, was raschelt im Stroh?* もよく歌われる。前者は四拍子、後者は三拍子である。わらべ歌、あそびの時の歌をとりあげても四拍子、三拍子は入り交っている。

四面諸外国にとりかこまれていることは、リズムの多様化を必然的におこす。クラシック音楽の本場であるドイツでは、只一つのリズムにしろるよりも多面性を持つと考えた方が良さそうである。然し北方民族であることはリズムよりもメロディーに関心が集まるようである。ドイツの森をさまよう時、ここにこそジークフリードの伝説やグリムの童話等が生まれたのであらうと、誰しも深く感動させられる。森の間をぬう小川や湖、草原に野鳥をひねもす眺めたり、やぐらを森の奥に組んで夕暮に姿を現わす親鹿小鹿を待つ。うちとるためではない。ただ見るために

## リズム

草色の帽子と外套に冷気を防ぎつつ辛棒強く、咳を押えて心をおどらす。冷雨のしぐれる森に木苒やきのこをあつめる。その風土は何れも光り輝く太陽とは縁遠くどんよりと重い。そこには静けさ *Rule* がある。少しの音にも耳をかたむけ敏感になる。雑音、騒音を極度に嫌い、くしゃみ、はなすすり、げっぷ、しゃっくり、食物や飲物を吸い込む音、飲物をカップに注ぐ音、靴を地面に擦らせる音、自転車をギヤーといわせて止める音、地声で歌うこと、等日本人にとっては考えもしない音に顔をしかめ、子供達をきびしくしつける。

吹田のアサヒビール会社の芝生で恒例の日独協会のビヤアーベントが催されるのは、七月下旬のうだるような暑いさ中である。バンドはドイツ人に向きそうなマーチやドナウ河、ウィーンの森等を奏する。生ビールの飲み放題、興の乗るにつれて芝生にはダンスをしてもよさそうなるいきがかもし出される。然し誰もあまり踊り出ようとしなない。学識教養高き人々の集まりであり、第一暑苦しい。ところが今年のビヤアーベントでは、次々といつもの音楽が奏される中に、突然××音頭が始まった。すると忽ち数人の日本人会員は手振り身振り踊りはじめた。それは阿波踊りのリズムであった。

ビートルズをはじめ若い音楽家が現代音楽の途を開いている。ジャズが若い世代にしみこんで、クラシック音楽はロメオとユーリヤの物語りのように、また平安時代の歌のやりとりによる社交のように、ゆるやかすぎて実用的でなくなった。然しリズムとコードの複雑な現代音楽やジャズは、メロディーを楽しむ北方民族には苦手である。ジャズはあくまでも太陽のギラギラとまばゆいばかりに照り輝く、暑い気候風土の中にこそ息づくものである。ドイツのしずまり、すましかえた森の中、または冬の夜長に暖房の利いた一家団らんにはぴったりしない。リズム感とは北方風土には育たないのである。ここにドイツの将来の音楽に対する悩みがあるように思われる。ドイツの文物に接する時それは多面的なリズムであると同時に、リズム感の悪いことを考えないと、理解の方向が別の途へそれることのあるのを忘れてはならない。

これにひきかえて日本は亜熱帯に位置し、南方民族の血が濃いようである。黒人のジャズのリズム感には程遠いにしても、まねごとではできないこともなく、良い作品も出ていて分相応に楽しんでいる。とはいえ所詮はメロディーに対する感受性にもリズム感にも限界があるのであろうか。恰かも日本の風土が熱帯性でも寒帯性でもないように現代音楽やジャズにおいても、クラシック音楽においても、今一と息という処で手が届かぬ思いである。